

# Hospitality

地域のホスピタリティを訪ねて

## 伝統を愛し、 伝統にとらわれない精神

有限会社吉原木工所 組子制作 吉原 敬司(よしはら・けいじ)

私の家は木工所を営んでいます。昭和33年の創業以来、木製家具・建具を中心としてあらゆる木製品を作ってきました。当初は家の納屋を改造しただけの狭い作業場。数台の機械たちは幼少の私にとって「近づいてはならない危険物」でしたが、母がいつも使っている「穴掘り機」だけは別。父の道具袋を内緒でゴソゴソしながら、赤い帽子にエプロン姿で忙しそうに働く母の横顔に何度も話しかけました。

「今度、オレ用の金づちこーえや。これより小さくて軽いやつ。お父ちゃんには絶対内緒で！」

いつもそばにあった木のおいや作る音。木工所の末っ子として生まれた私の幼いころからの夢は、兄と一緒に父の稼業を継ぐことでした。

「お前は人の出来ん仕事をする職人になれ。これからの金儲けとは、そういうことだ。」

私が見習い工として北陸富山に弟子入りするとき、父がくれた言葉です。ずっと信じてきたこの言葉に私は何度も傷つけられ、そして何度も救われました。私が習得した「組子」という伝統技術、欄間(らんま)や書院障子は手間とコストがかかることから、現代の建築には取り入れられなくなっているという厳しい現状でした。

何を作っても売れない…。職人になった以上、それでも組子を作りたい。悩んでいたある日、ラーメン屋で語る若いデザイナーの話に驚愕したことがあります。「お箸だって見方を変えるとただの棒。2本の棒は使い方の提案によって食事の道具になる。つまりデザインとは、物事に意味を持たせるとのことなんですね。」

デザインという言葉があまりに簡単に使われすぎていて、その本質を全く理解していなかった自分。お箸も障子も全て意味があり、それは日本人の暮らしや文化と密接な関係があること。まさに伝統といわれるモノ・コトは全て、ずっと先人が培ってきたデザインによるものだということに初めて気付かされたのです。それからは、作る(創る)ことが怖くなりました。ものづくりは「概念(コンセプト)」が最も大切であるということを知ったからです。



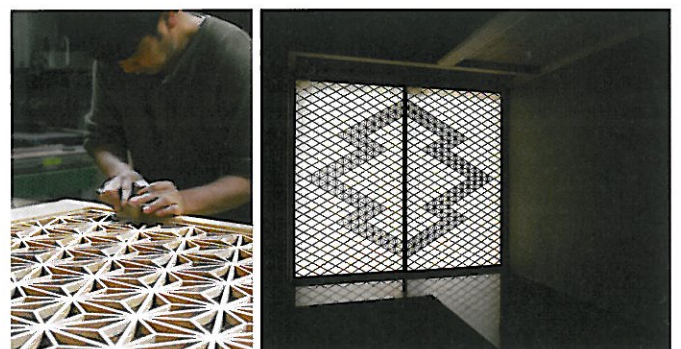
組子の技法を駆使し、二年半掛かりで構想を練ってきたオリジナル障子が2013年グッドデザイン賞を授賞しました。「リビング障子」和室や床の間といえ、子どもが遊んではいけないと言わ



れた空間。使いにくいとされる和室だけに障子をたてるのではなく、現代人が最も心地よく滞留するリビングにこそ障子をたてて欲しいという考え方と発想の転換が評価されたものです。まだ世の中にない組子のデザインとは、リビング向けの障子だと気が付いたのでした。

建築に限らず、伝統的なモノ・コトというのは、その時代に生きる人々にとって心地よいからこそ受け入れられるもの。例えそれがどんなに優れていても、柔軟さがなければ伝統はいつか途絶えてしまいます。

日本のものづくり職人が今求められているのは、伝統を愛し、伝統にとらわれない精神。これからもこだわりを持ちながら、新たな一歩に挑戦する職人であり続けたいと願います。



有限会社吉原木工所 <http://yoshiharawoodworks.com/>